

## 思春期の身体発達の開始と心理的適応 に関する縦断的研究

筑波大学心理学系 加藤 隆 勝

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 加藤 厚・斉藤 誠 一

A longitudinal study on the effect of adolescent growth spurt on psychological adjustment

Takakatsu Kato, Atsushi Kato, and Seiichi Saito  
(Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305)

The purpose of this study was to investigate the effect of adolescent growth spurt on psychological adjustment.

Ninety two male and 98 female public elementary school pupils answered same questionnaires four times with six month intervals at grades five and six. The adolescent growth spurt was defined as more than five percent annual gain in height based on national statistics.

The principal results were as follows:

- (1) Post-spurt boys had significantly more positive self-concept than pre-spurt and in-spurt boys.
- (2) Mentions of "psychological maturity" as the answer to the question about changes in oneself tended to increase, and those of "simple behavioral characteristics" tended to decrease both in boys and girls as they grew older.
- (3) Both boys and girls had positive images about "father," "mother," and "pupils of the same sex," and negative images about "pupils of the opposite sex."
- (4) The growth spurt made images of "father" and "mother" less positive in boys, and made the image of "girls" more positive in girls.

Key words: longitudinal study, adolescent growth spurt, self-concept, recognized change in oneself, image of important others.

これまで、思春期における身体発達および性的成熟は青年に自信を与える一方で、危機感をもたせ、不安や動揺をもたらすものとして扱われてきた。たとえば、その場理論的分析を通してわが国の青年研究者にも大きな影響を残した Lewin, K. (1951) は、青年期を子どもの集団から大人の集団への移行期として位置づけ、行動の不確実性が特徴となると説明したが、身体的変化が不確実性を増大させることについても触れている。つまり、人間にとって身体は最も身近な、よく知られている領域であるが、性的成熟によってこれが未知の信頼できない領域に変化してくるので、自らの立つ地盤の安定性が揺らぎ、ひいては世界全体の安定性にも疑いをもつようになるとしている。また、精神分析的立場から見た場合、青年期は性的衝動の著しい増大によって、強いイドに弱い自我が対面させられる時期で、不安、葛藤、

強い防衛などが生じるとされている。身体発達および性的成熟に伴うこのような不安や動揺は、青年の手記や自伝的文学作品等の中で表現され、また行動観察やカウンセリングを通してとらえられ、一般に紹介されてきたところでもある。

しかし、身体発達および性的成熟と心理的適応の関係は実証的レベルで十分検討されてきたとはいえない。研究数が少ない上、研究結果に一貫性がないのが現状である (Peterson, A. C. & Taylor, B., 1980)。一例をあげると、古くは Mussen, P. H. & Jones, M. C. (1957) が早熟児と晩熟児の比較研究を発表し、早熟児は晩熟児に比べ、対人態度、自己概念等でより健康で望ましい結果を示すことを報告したが、Peskin, H. (1967) の研究では、早熟は逆に人格のさまざまな側面でむしろ negative な効果をもつことを報告している。

このような矛盾した結果をどう解釈すべきか、われわれはその材料を持ち合わせていない。ただし、心理学では身体発達および性的成熟が青年に危機意識をもたせる面を強調しすぎた点は指摘できるであろう。身体発達および性的成熟は、他面では成長する喜びや自信を与え、安定感をもたらすことを見逃してはならない。また、身体発達と性的成熟の及ぼす効果は同じではなく、それぞれ別の効果をもつことが考えられるし、さらには、身体発達および性的成熟を青年がどう受け止めるかは、社会文化的条件によって異なるとともに、時代的变化が著しいとみなければならぬであろう。このように、身体発達および性的成熟の与える心理的影響は、単一方向にあるのではなく、矛盾した方向を含む複合的なものとみてよいであろう。しかし、残念ながら現段階では、身体発達および性的成熟と心理的適応の関係を具体的に説明する客観的資料は十分整っていない。

本研究は予備的研究としての性格をもつものであるが、以上の検討をふまえながら、青年期の心身の相関関係の検討の一環として、身体発達および性的成熟と心理的適応の対応関係を明らかにすることを目的として実施されたものである。具体的には、思春期の身体発達および性的成熟が開始される小学校高学年の児童を2年間、4回にわたり追跡調査した結果を報告する。

## 方 法

### 1. 調査対象

東京都内および横浜市内の公立小学生を対象に5年、6年の2年間、4回にわたり同一調査を実施した。調査対象者数は、男子100名、女子104名(学級数6)であったが、4回の調査データのそろっているもの男子92名、女子98名についての分析を行った。

### 2. 調査内容

4回の調査とも同一内容で、次のものが含まれる。

- (1) 身体計測 身長、体重、胸囲(胸囲のみ年1回) 女子については初潮の時期
- (2) 心理的適応に関する調査。具体的な質問項目は付表に示す。
  - ① 自己概念(SD法)
  - ② 父および母についての認識(自由記述)
  - ③ 「男の子」および「女の子」についての認識(自由記述)
  - ④ 自己の変化についての認識(自由記述)
  - ⑤ 身体や性格についての悩み

### 3. 調査の実施時期

- 第1回(5年前期) 5年生の6月-7月(1982年)  
 第2回(5年後期) 5年生の12月-1月(1982-83

年)

第3回(6年前期) 6年生の6月-7月(1983年)

第4回(6年後期) 6年生の12月-1月(1983-84

年)

## 4. 分析方法

身体発達および性的成熟と心理的適応の関係を明らかにするため、次の観点から分析を行った。

- (1) 4回の測定時点を通しての身体発達および心理的特徴の平均的推移
- (2) 身体計測値の大きさと心理的特徴の関係
- (3) 思春期の身体発達の未発現群、現発現群、終了群における心理的特徴の比較
- (4) 思春期の身体発達の開始が心理的特徴に及ぼす影響
- (5) 女子の既潮者群と未潮者群における心理的特徴の比較

ただし、本報告では、上記の分析のうち主な成果についてのみ発表する。

なお、上記(3)および(4)の思春期の身体発達(発育のスパート)の「発現」「未発現」の判定は次の基準によった。文部省学校保健調査報告書(昭和55年度)によると、身長の場合、平均の伸び率(伸びの値/身長)が最大となるのは、男子11-12歳でその値は0.048となり、女子は9-10歳で、伸び率は0.049となる。本研究では、各個人の4時点での伸び率を年間伸び率に換算し、男女とも0.05以上となった場合、思春期発達が発現したものと判定した。

Table 1は第4回調査(6年後期)時点において思春期発達の発現・未発現によるグループ分けを示したものであり、Table 2はその発現パターンを示したものである。なお、発達の過程が不規則で、発現中か終了かなどの判定が困難な調査対象者はこの分析から除かれている。

また、本研究では、身体発達の指標として身長、体重、胸囲の計測値を用いて心理的適応との関係を分析したが、身長、体重のいずれを指標にしてもほぼ同様な傾向が得られたので、本報告では身長の場合を中心に報告する。なお、胸囲については年1回の計測しか行わなかったため、今回の分析では省略してある。

Table 1 身体発育のスパートの発現によるグループ分け

	未発現群	現発現群	終了群
男子	42	30	4
女子	22	16	28

Table 2 身体発達のスパートのパターン

群	パターン	男子	女子
未発現	0000	42	22
現発現	0001 <sup>†</sup>	14	6
	0011	4	2
	0111	11	7
	1111	1	1
終了	0110	1	7
	1100	0	17
	1110	3	4

† 1は発達のスパートの発現, 0は未発現を示す。

たとえば, 0001は6年後期(第4回計測)で発現したことを示す。

### 身体発達と自己概念

すでに指摘したように, 思春期の身体発達は青年の自己に対する見方を変えるような体験であるとされてきたので, 最初に身体発達と自己概念の関係から検討する。

#### 1. 自己概念の測定方法

自己概念の測定にあたっては, 加藤・堀・高木(1981)が作成した20対の形容詞対を用い, 「最近の私」と「理想(できればこうありたい)の私」について, それぞれ6件法で回答を求め, 1点から6点を与える方法によった。また, この尺度は因子分析の結果にもとづいて以下の4つの下位尺度によって構成されているので, 結果の分析においては主に

下位尺度ごとの考察を行った。

- (1) 誠実性……「まじめな-ふまじめな」「けじめのある-けじめのない」「上品な-下品な」「責任感のある-責任感のない」など
- (2) 明朗性……「あかるい-くらい」「元気な-元気のない」「自由な-きゅうくつな」「たのしい-つまらない」など。
- (3) 権威性……「きびしい-やさしい」「いばる-したがう」「考えが古い-考えが新しい」
- (4) あたたかさ……「あたたかい-つめたい」「すきな-さらいな」「思いやりのある-自分勝手な」

#### 2. 身体発達および自己概念の全体的傾向

4回の測定時点における身体計測値の平均をTable 3に, また, 身体計測値間の相関をTable 4に示す。身長, 体重, 胸囲はいずれも全国平均と同水準にあり, サンプルとして大きな偏りはないとみなされる。また, 4時点の変化をみると, 本調査の範囲では後期(12月-1月)から前期(6月-7月)までの変化より, 前期から後期までの変化が大きいのが特徴である。なお, 身体計測値間では, 体重と胸囲の相関が最も高く, 身長と胸囲の相関は相対的に低くなっている。

Table 4. 身体計測値の相関(6年前期)

	男子	女子
身長-体重	.75	.70
身長-胸囲	.53	.53
体重-胸囲	.91	.94

Table 3. 身体計測値の平均

	男 子			女 子			既潮者人(%) <sup>†</sup>
	身長cm (S D)	体重kg (S D)	胸囲cm (S D)	身長cm (S D)	体重kg (S D)	胸囲cm (S D)	
5年 前期	137.5 (6.4)	33.0 (7.0)	67.6 (6.4)	138.9 (6.8)	33.6 (6.4)	66.9 (6.1)	2 (2.5)
5年 後期	142.3 (7.0)	36.4 (7.8)		144.3 (7.0)	37.4 (7.1)		9 (11.3)
6年 前期	143.7 (7.3)	36.9 (7.9)	69.7 (6.6)	145.6 (6.9)	38.1 (7.3)	70.3 (6.4)	18 (22.5)
6年 後期	148.5 (7.7)	40.4 (8.5)		149.7 (6.6)	41.4 (7.3)		40 (50.0)

† データを得られなかった学級があるため, 全体を80名として計算してある。

次に自己概念（「現実自己」と「理想自己」）の平均得点を Table 5 および Fig 1 に示す。「現実自己」においては明朗性の得点が高く、権威性の得点が低いのが特質である。また、4回の調査時点を通じて得点の変化が少なく、全体として安定した自己概念をもっているものと推測される。「理想自己」においては「現実自己」よりもさらに高い明朗性、誠実性、あたたかさが求められる一方、権威性への要求はさらに低くなっている。「理想自己」の得点も4回の調査時点を通じて変化が少なく、安定している。したがって、従来いわれているような自己に対する危機意識や不安、動揺といったものを「現実自己」や「理想自己」の平均得点からうかがうことはできない。「現実自己」「理想自己」とも、われわれが当初予想したより時間の経過に伴う変化が遙に少ない結果となっている。

### 3. 身長の高さや増加量と自己概念の関係

身体の高さは他者との優劣関係に影響するなど、自己概念を規定する1つの重要な要因と考えられる。そこで、はじめに身長の高さや増加量と自己概念の関係を検討してみる。

Table 6 は、4回の計測時点ごとに身長の高さの上位25%、下位25%をとり、両群について自己概念の得点の差を検定（t検定）した結果である。

男子では「現実自己」に関しては有意差が認められないが、「理想自己」については、6年後期において上位群が誠実性、あたたかさをより高く求めていることが示されている。これに対し、女子では「現

実自己」に有意差がみられ、5年前期や6年前期において、いずれも上位群が自己の明朗性やあたたかさをより高く評定している。

次に4回の計測時点ごとに、身長の高さの増加量の上位25%、下位25%をとって、両群の自己概念の得点の差を検定した結果を Table 6 にあわせて示した。男子では6年前期の時点で「現実自己」に有意差がみられ、いずれも上位群が自己の誠実性、明朗性、あたたかさをより高く評定している。また、「理想自己」においても、上位群が明朗性やあたたかさをより高く求めていることが示されている。女子では6年前期の「理想自己」において有意差がみられ、上位群が誠実性やあたたかさをより高く求めている。

以上のように、全体として有意差の数が多いとはいえないが、有意差を示す場合は、すべて身長および身長の高さの増加量の大きい群が自己をより誠実、明朗で、あたたかい、とみる傾向が高く、理想としてもそれらを高く求める傾向が認められる。したがって、身長や身長の高さの増加量が大きいことは、肯定的、受容的な自己概念をもたらし方向に作用しているものと推測される。

### 4. 発育のスパートの発現と自己概念の関係

Table 1 に示したように、思春期の身長発育のスパートの発現の有無によって調査対象を3群に分け、自己概念得点を示したのが、Table 7 および Fig. 2, Fig. 3 である。また Table 8 は各群間の有意差の検定結果である。

「現実自己」についてみると、男子では6年後期

Table 5. 現実自己と理想自己の平均得点

	調査時点	現 実 自 己				理 想 自 己			
		誠 実 性 (S D)	明 朗 性 (S D)	権 威 性 (S D)	あ た た か さ (S D)	誠 実 性 (S D)	明 朗 性 (S D)	権 威 性 (S D)	あ た た か さ (S D)
男 子	5 年 前 期	3.82 (0.76)	4.84 (0.75)	3.19 (0.77)	4.01 (0.78)	5.28 (0.74)	5.67 (0.48)	2.61 (1.01)	5.19 (0.93)
	5 年 後 期	3.77 (0.70)	4.83 (0.80)	3.15 (0.80)	3.85 (0.73)	5.32 (0.73)	5.68 (0.47)	2.47 (0.84)	5.30 (0.87)
	6 年 前 期	3.96 (0.85)	4.78 (0.98)	3.27 (0.65)	3.98 (0.89)	5.35 (0.71)	5.65 (0.52)	2.67 (0.80)	5.32 (0.81)
	6 年 後 期	3.97 (0.82)	4.84 (0.84)	3.15 (0.78)	3.97 (0.90)	5.33 (0.70)	5.59 (0.60)	2.56 (0.77)	5.35 (0.78)
女 子	5 年 前 期	3.94 (0.56)	4.94 (0.73)	3.00 (0.66)	4.04 (0.74)	5.41 (0.64)	5.65 (0.51)	2.12 (0.78)	5.57 (0.54)
	5 年 後 期	3.96 (0.67)	4.80 (0.91)	2.99 (0.66)	3.98 (0.70)	5.32 (0.56)	5.67 (0.46)	2.09 (0.68)	5.59 (0.50)
	6 年 前 期	3.98 (0.72)	4.85 (0.91)	2.99 (0.70)	3.98 (0.84)	5.38 (0.57)	5.71 (0.45)	2.15 (0.60)	5.57 (0.58)
	6 年 後 期	4.05 (0.76)	4.73 (0.87)	3.03 (0.65)	4.01 (0.83)	5.29 (0.59)	5.63 (0.52)	2.31 (0.60)	5.45 (0.56)

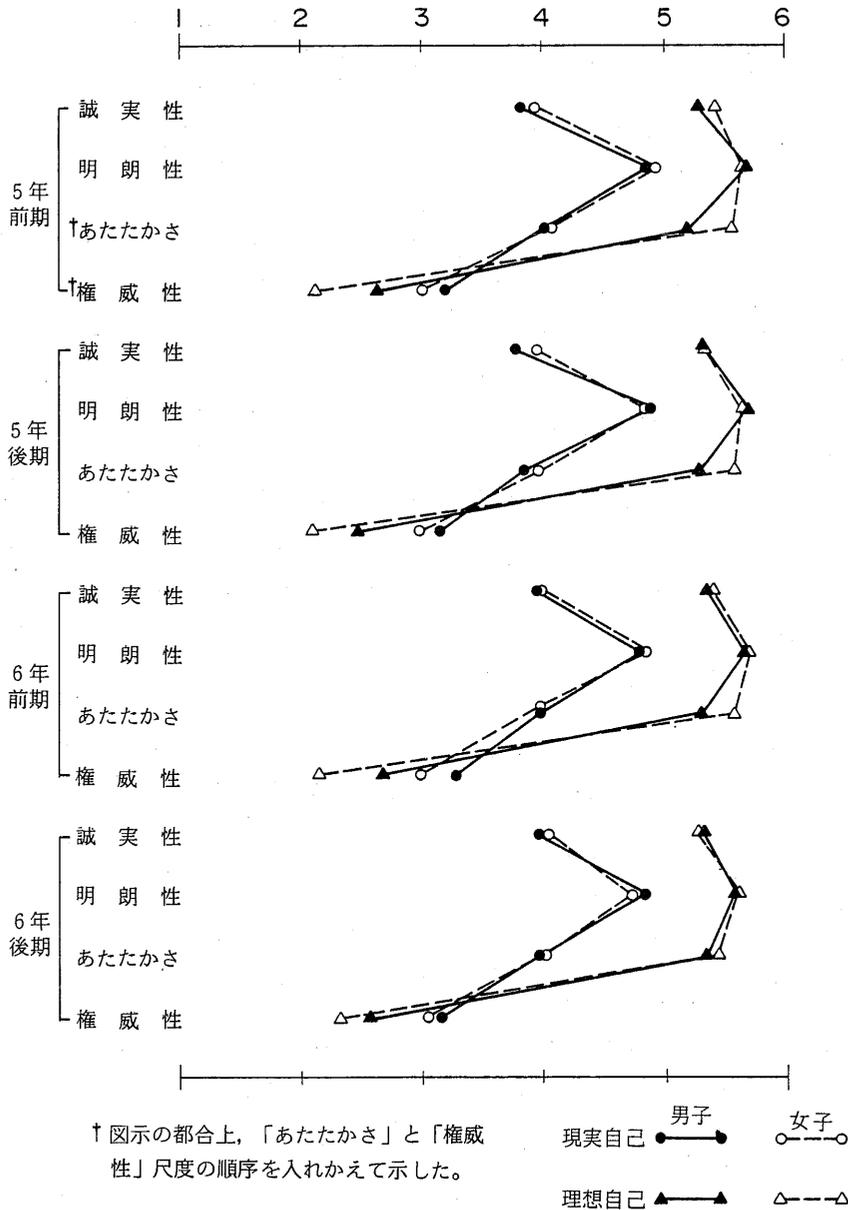


Fig. 1 現実自己と理想自己の平均得点

において有意差が多く、終了群は未発現群よりも明朗性とあたたかさの得点が高く、権威性の得点が低くなっている。また、現発現群は未発現群よりあたたかさの得点が高くなっている。同様に6年前期においても、終了群は未発現群、現発現群より権威性の得点が低い結果になっている。終了群は未発現群より自己を明朗で、権威的でなく、あたたかい、とみていることが明らかである。同様に、有意差を示

すものは1つにすぎないが、この傾向は現発現群と未発現群の間にも認められる。全体として発育のスパートの早い群が、より肯定的、受容的な自己概念をもつことが示されている。

しかし、女子の場合は、Fig. 3およびTable 8に示されているように、発育のスパートの有無による自己概念(現実自己)の差はみられない。身体発達のもたらす意味が男子と女子では異なることが想定

Table 6 身長の上及び身長増加量の上及び身長増加量の上による自己概念の差の検定

調査 時点	††† 尺度	身長 <sup>†</sup>				身長増加量 <sup>††</sup>			
		男子		女子		男子		女子	
		現実自己	理想自己	現実自己	理想自己	現実自己	理想自己	現実自己	理想自己
5年 前期	I								
	II			L << H		L > H			
	III								
	IV								
5年 後期	I								
	II								
	III								
	IV								
6年 前期	I					L < H		L < H	
	II			L < H		L < H			
	III								
	IV			L << H		L < H		L < H	
6年 後期	I		L < H			L < H			
	II								
	III								
	IV		L < H						

† 身長の上位、下位それぞれ25%をもって上位群(H), 下位群(L)とした。

†† 身長増加量の上位、下位それぞれ25%をもって上位群(H), 下位群(L)とした。

††† 尺度I 誠実性, II 明朗性, III 権威性, IV あたたかさ, を示す。

†††† >は左の群が右の群より5%水準で高得点, ≥は1%水準で高得点であることを示す。

されるが、この点についてはさらに詳細な分析が必要である。

「理想自己」に関しては、男女とも群間で有意差を示すものがいくつか認められる。これらを統一的に解釈するのは困難であるが、女子の6年後期においては、終了群が未発現群、現発現群より非権威的でありたいと望む傾向が強いことが示されている。

なお、体重の発育スパートの有無によってグループ分けをし、自己概念との関係をみた結果では、「現実自己」に関して、男子では現発現群が未発現群より誠実性の得点が高く、女子では現発現群および終了群が未発現群より権威性の得点が低く、あたたかさの得点が高い傾向が示された。男子の身長の場合と同様に、発育のスパートの早い群がより肯定的、受容的な自己概念をもつといえる。しかも体重の場合には、女子も男子と同様な傾向を示したことは興味深い。

### 自己の変化の認識

ここでは、思春期における自己の変化の認識について、その縦断的变化、性差、および身体発育のスパートの開始の影響を検討する。

自己の変化の認識の発達に関する研究としては、6歳から12歳のフランス人の児童を対象として、標準化された個人面接によって横断的な検討を行った Zazzo (1969)、同様の方法で4歳から6歳までの児童について検討した都筑 (1981) 等がある。しかし上の2研究はいずれも横断的かつ記述的な水準の検討に留まっており、縦断的なアプローチによる「変化」の追及、および生物学的な要因の影響の評定等により精密で分析的な検討は行われていない。そこで本研究では、縦断的なアプローチによって、思春期における自己の変化の認識の発達を確認するとともに、その過程における性差、身体発育のスパートの影響等の解明を目的とする分析を行う。

Table 7. 身体発育のスパートによる群別の現実自己と理想自己の平均得点

	調査時点	群	現 実 自 己				理 想 自 己			
			誠実性 (S D)	明朗性 (S D)	権威性 (S D)	あたたかさ (S D)	誠実性 (S D)	明朗性 (S D)	権威性 (S D)	あたたかさ (S D)
男	5 年 前期	未発現	3.90 (0.60)	4.75 (0.70)	3.13 (0.61)	3.98 (0.81)	5.32 (0.54)	5.70 (0.44)	2.39 (0.82)	5.33 (0.69)
		現発現	3.97 (0.88)	5.02 (0.62)	3.12 (0.80)	4.18 (0.58)	5.31 (0.76)	5.70 (0.49)	2.66 (1.15)	5.19 (1.06)
		終了	4.00 (0.76)	5.40 (0.52)	3.33 (1.22)	4.44 (0.66)	4.63 (1.23)	5.05 (0.68)	3.17 (1.23)	4.63 (1.16)
	5 年 後期	未発現	3.70 (0.66)	4.77 (0.81)	3.06 (0.69)	3.85 (0.65)	5.40 (0.57)	5.67 (0.48)	2.46 (0.85)	5.38 (0.59)
		現発現	4.04 (0.67)	5.02 (0.64)	3.09 (0.92)	4.05 (0.60)	5.36 (0.90)	5.73 (0.38)	2.28 (0.77)	5.41 (0.80)
		終了	3.88 (0.59)	5.15 (0.84)	3.42 (0.57)	3.75 (0.89)	5.16 (0.86)	5.45 (0.97)	2.58 (0.57)	5.13 (1.03)
	6 年 前期	未発現	3.97 (0.77)	4.81 (1.01)	3.34 (0.65)	3.97 (0.83)	5.35 (0.70)	5.70 (0.45)	2.63 (0.77)	5.37 (0.70)
		現発現	4.20 (0.70)	4.90 (0.76)	3.16 (0.61)	4.09 (0.75)	5.54 (0.62)	5.68 (0.47)	2.64 (0.84)	5.34 (0.90)
		終了	4.19 (1.53)	5.80 (0.28)	2.42 (1.00)	5.00 (0.84)	5.06 (0.63)	5.70 (0.60)	2.17 (0.33)	5.25 (0.74)
6 年 後期	未発現	3.93 (0.76)	4.78 (0.84)	3.22 (0.66)	3.86 (0.83)	5.30 (0.62)	5.57 (0.58)	2.63 (0.77)	5.35 (0.71)	
	現発現	4.19 (0.76)	5.03 (0.69)	3.02 (0.78)	4.31 (0.84)	5.35 (0.68)	5.65 (0.43)	2.43 (0.55)	5.47 (0.58)	
	終了	4.66 (1.37)	5.75 (0.30)	2.25 (1.00)	4.81 (0.59)	5.69 (0.54)	6.00 (0.00)	2.00 (0.98)	5.69 (0.63)	
女	5 年 前期	未発現	3.98 (0.58)	4.85 (0.86)	3.08 (0.59)	3.96 (0.81)	5.54 (0.54)	5.55 (0.60)	2.24 (0.65)	5.75 (0.32)
		現発現	3.84 (0.52)	4.79 (0.67)	3.10 (0.48)	3.85 (0.61)	5.14 (0.81)	5.45 (0.65)	2.44 (0.87)	5.27 (0.78)
		終了	4.04 (0.63)	5.06 (0.66)	2.96 (0.87)	4.17 (0.67)	5.58 (0.46)	5.76 (0.42)	1.90 (0.66)	5.70 (0.42)
	5 年 後期	未発現	3.94 (0.52)	4.59 (1.10)	3.26 (0.63)	3.82 (0.67)	5.22 (0.56)	5.49 (0.54)	2.35 (0.79)	5.52 (0.49)
		現発現	3.72 (0.69)	4.81 (0.93)	2.85 (0.86)	3.78 (0.74)	5.25 (0.60)	5.75 (0.46)	1.98 (0.84)	5.53 (0.69)
		終了	4.06 (0.81)	4.96 (0.84)	2.98 (0.65)	4.00 (0.78)	5.50 (0.49)	5.68 (0.53)	1.99 (0.54)	5.63 (0.50)
	6 年 前期	未発現	3.98 (0.59)	4.75 (0.89)	3.14 (0.69)	3.88 (0.82)	5.22 (0.62)	5.59 (0.46)	2.26 (0.63)	5.44 (0.61)
		現発現	3.84 (0.85)	4.89 (0.77)	2.88 (0.78)	3.97 (0.87)	5.38 (0.74)	5.61 (0.65)	2.17 (0.74)	5.39 (0.74)
		終了	3.95 (0.86)	4.68 (1.05)	3.02 (0.77)	3.79 (0.92)	5.44 (0.53)	5.68 (0.50)	2.12 (0.62)	5.60 (0.59)
6 年 後期	未発現	3.97 (0.81)	4.66 (0.81)	3.33 (0.42)	3.88 (0.68)	5.30 (0.59)	5.60 (0.50)	2.51 (0.60)	5.46 (0.53)	
	現発現	3.97 (0.70)	4.84 (0.94)	3.00 (0.70)	3.88 (0.87)	5.15 (0.76)	5.47 (0.64)	2.46 (0.70)	5.31 (0.77)	
	終了	4.14 (0.73)	4.07 (0.90)	2.94 (0.72)	4.12 (0.95)	5.48 (0.51)	5.63 (0.56)	2.00 (0.51)	5.49 (0.55)	

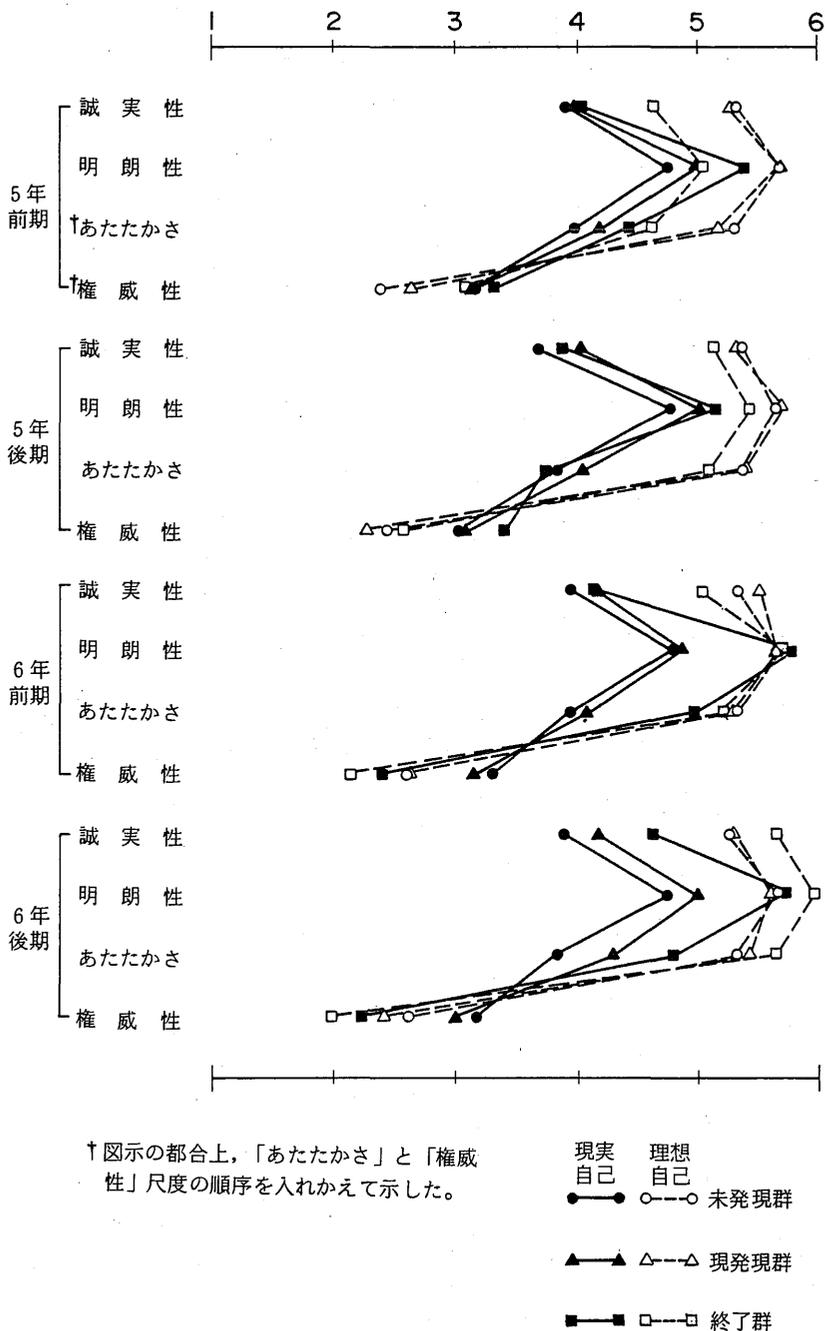


Fig. 2 身体発育のスパートによる群別の現実自己と理想自己の平均得点。(男子)

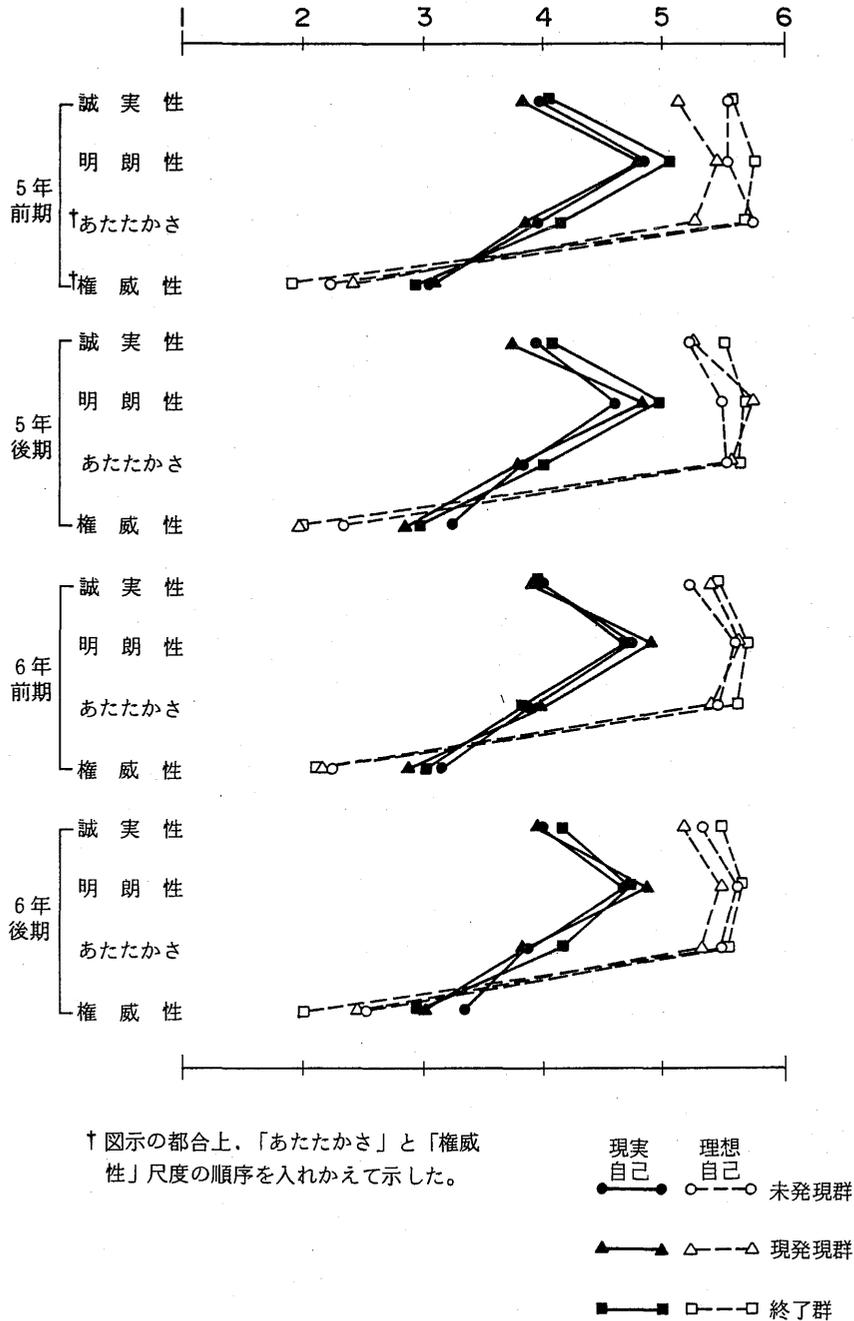


Fig. 3 身体発育のスパートによる群別の現実自己と理想自己の平均得点(女子)

Table 8 各群間<sup>†</sup>の差の検定<sup>†††</sup>

調査 時点	尺 <sup>††</sup> 度	現 実 自 己				理 想 自 己			
		3 群間	未一現	未一終	現一終	3 群間	未一現	未一終	現一終
男	5 年 前期	I							
		II				*		>	>
		III							
		IV							
	5 年 後期	I							
		II							
		III							
		IV							
子	6 年 前期	I							
		II							
		III	*		>	>			
		IV							
	6 年 後期	I							
		II	*		<				
		III	*		>				
		IV	*	<	<				
女	5 年 前期	I							
		II							
		III					*		>
		IV					**	>	<
	5 年 後期	I							
		II							
		III							
		IV							
	6 年 前期	I							
		II							
		III							
		IV							
6 年 後期	I								
	II								
	III					**	>	>	
	IV								

† 表中の未は未発現群，現は現発現群，終は終了群を示す。

†† 尺度 I 誠実性，II 明朗性，III 権威性，IV あたたかさ，を示す。

††† 分散分析による多重比較，\* $p < .05$ ，\*\* $p < .01$ ，また，>は左の群が右の群よりも5%水準で高得点であることを示す。

## 1. 方法

調査対象者および調査時期は先に述べたとおりである。質問紙の3の(5)と(6)、「去年の今ごろとくらべて、最近のあなたはどんなところが変わったと思いますか」および「来年の今ごろのあなたは、今のあなたとどんなところが変わっていると思いますか」の両設問に対して回答された自由記述文の内容が分析された。

**カテゴリーの作成と分類** 本研究では、思春期における発達的变化に特に注目しているので、Zazzoらのカテゴリーに以下の変更を行った。

- (a) 第2次性徴的な身体変化(声がか変わった、体型がか変わった等)は、一般的な身体、運動能力の変化とは別カテゴリーとした。
- (b) 気分・性格に関する変化のカテゴリー(明るくなった、おこりっぽい等)をもうけた。

(c) 「他者との関係」を「同性との関係」、「異性との関係」、「その他との関係」の3カテゴリーに区分した。

全12カテゴリーの名称および各カテゴリーに分類された回答例が Table 9 に示されている。

各カテゴリーの妥当性および分類手続きの信頼性を検討するために、適切にサンプリングされた6名の回答を青年心理学専攻の大学院生2名で独立に分類したところ、その一致率は96.5%であった。

## 2. 結果と考察

### (1) 去年から今年への変化

「去年から今年への変化」についての回答において、各カテゴリーに関する変化に言及した者の割合を男女別に Table 10 および Fig. 4, Fig. 5 に示した。表中の\*印は、同一時点において各カテゴリーに言及した者の比率の性差の $\chi^2$ 検定の結果である。

「気分・性格」および「身体・運動（一般）」には全体の約3分の1、「単純な行動特徴」および「心理的成熟」には全体の約4分の1の者が言及しており、これらの領域が彼らの自己への関心の主要な部分を占めていることを示している。「気分・性格」および「心理的成熟」のカテゴリーへの言及は、女子の方が男子よりも一貫して多い。「心理的成熟」および「単純な行動特徴」への言及は男女ともに前者が増加、後者が減少の傾向を示しているが、「身体・運動（一般）」への言及は女子では減少しているのに対して、男子では増加の傾向が認められる。

自己の変化の認識における主要な領域とその性差、および両性に共通の発達の傾向と男女各々に固有の発達の傾向のパターンが示された。

身体発育のスパートの開始が、認識された自己の変化の発達に及ぼす影響の大きさの検討は、以下の手続きで行われた。

Table 9. 認識された自己の変化の分類カテゴリーと回答例

身体・運動（一般）	： 一般的な身体および運動能力・筋力等の変化 [背が高くなった, 体重がふえた, 視力がさがった, 体力がつく]
身体（第2次性徴）	： 身体に関する変化で特に第2次性徴的なもの [声が変わる, 顔が変わった, 大人っぽくなる†, きれいになる]
学習（能力・態度）	： 学習に関する能力や態度 [勉強するようになった, 頭がよくなる, 授業のうけ方がかわった]
単純な行動特徴	： [いそがしくなる, おしゃべり, よくあそぶ, テレビをすぐみる]
気分・性格	： [明るくなった, すぐ悲しくなる, おこりっぽい, おちつかない]
心理的成熟	： 行動・性格特徴のうちで心理的成熟を示唆する変化 [てつだいをする, やさしくなる, おちついた, 責任感がでた]
学年・地位	： [中学にいく, 中学生らしい私になる†]
同性との関係	： [友だちがふえた, 友だちが変わるだろう]
異性との関係	： [男の子とけんかしなくなった, 男の子になにか言われても気にしない]
その他との関係	： 先生・先輩等との関係 [先生に対する態度が変わった, よくおこられるようになった]
分類不能	： 不十分な情報のため分類不能 [いろいろかわった, よくなった, すこしかわった]
無答・わからない	： [無答, わからない, かわらない]

† 2つのカテゴリーにあてはまるものは両方にカウントした（「大人っぽくなる」、「男らしくなる」が身体（第2次性徴）と心理的成熟、「中学生らしい私になる」が学年・地位と心理的成熟、「字がきれい」が学習と心理的成熟、等）

Table 10. 各カテゴリーの変化に言及した者の割合 (%)  
(去年から今年への変化)

	男子 (N = 90)				女子 (N = 98)			
	5年前期	5年後期	6年前期	6年後期	5年前期	5年後期	6年前期	6年後期
身体・運動 (一般)	37.8	35.6	40.0	45.6**	36.7	28.6	30.6	24.5
身体 (第2次性徴)	2.2	12.2	7.8	7.8	8.2	7.1	10.2	6.1
学習 (能力・態度)	16.7	15.6	27.8	16.7	18.4	15.3	18.4	24.5
単純な行動特徴	40.0	24.4	10.0	21.1	35.7	25.5	23.5*	23.5
気分・性格	25.6	26.7	25.6	33.3	39.8	49.0**	35.7	41.8
心理的成熟	13.3	16.7	18.9	27.8	18.4	27.6	37.8**	38.8
学年・地位	2.2	0.0	3.3	2.2	0.0	1.0	0.0	1.0
同性との関係	7.8	10.0	3.3	2.2	7.1	8.2	12.2*	9.2
異性との関係	2.2	1.1	1.1	2.2	1.0	4.1	11.2*	3.1
その他との関係	1.1	1.1	0.0	0.0	1.0	2.0	0.0	1.0
分類不能	2.2	6.7	4.4	1.1	1.0	2.0	3.1	3.1
無答・わからない	67.8	65.6	72.2	65.6	64.3	64.3	60.2	64.3

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$  (高い比率を示した方に\*\*や\*の記号をつけてある)

① 調査対象者のうち一定の条件を満たした者を選び出して、開始群 (男子15名, 女子16名) および対照群 (未発現群: 男子41名, 女子22名) を構成した。前者の条件は本研究がカヴァーしている4時点 (5年前期, 後期; 6年前期, 後期) の間の3つの期間のいずれかで身長伸びのスパートが始まり, かつ2期以上にわたって連続していること, 後者の条件は, いずれの時期においても身長伸び率が0.05未満であることである。

② あるカテゴリーへの言及を1つ10点に得点化し, 開始群においては初めてスパートが認められた時期の前後の変化 (スパート後の値-スパート前の値) を, 対照群においては5年前期から5年後期の変化 (5年後期の値-5年前期の値) を算出して, 2群間で変化の差の検定を行った。

なお, 対照群でこの期間を選んだのは, 開始群の8割以上がこの期間にスパートの開始を示しているためである。

両群における変化の値と検定結果は, Table 11に示したとおりである。2群間で有意な差が認められたのは, 女子における「気分・性格」への言及のみであった ( $t=2.29$ ,  $df=36$ ,  $p<.05$ )。この結果は, 身体発育のスパートの開始は, 女子においては自己の気分・性格への関心を高め言及を増加させるものの, 認識された自己の変化の発達を規定する要因としては必ずしも重要なものではないことを示唆している。

(2) 今年から来年への変化の予想

「今年から来年への変化」についての回答におい

て各カテゴリーに関する変化に言及した者の割合を男女別に Table 12に示した。

「身体・運動 (一般)」に全体の約3分の1が言及しているのは「去年から今年への変化」と同様だが, 「気分・性格」への言及は全体では約2割に減少し, 代わりに「心理的成熟」に言及する者が3割を越えている。「心理的成熟」および「気分・性格」への言及が女子により多い傾向は, 「去年から今年への変化」と同様である。発達の变化の性差としては, 「心理的成熟」への言及が男子ではほぼ直線的に増加しているのに対して, 女子では5年前期ですでに男子の6年後期の水準に達しており, その後高め安定の推移を示す点, および「同性との関係」への言及が, 5年前期では男女ほぼ同水準であるのに, その後男子では減少, 女子では増加してゆく点等が興味深い。前者の知見は, 「去年から今年への変化」の「心理的成熟」への言及における女子の早熟傾向 (5年後期にはすでに男子の6年後期の水準に達している) とあわせて, 男子より1~2年早いとされる女子の成熟が, 身体発育だけでなく, 自己の変化の認識といった心理的発達においてもあてはまることを示唆している。

身長伸びのスパートの開始が「今年から来年へ自己の変化の予想」に及ぼす影響を検討した結果を Table 13に示した。分析手続きは「去年から今年への変化」の場合と同様である。身体発育のスパートの開始が女子において「身体・運動 (一般)」への言及を減少させ ( $t=2.35$ ,  $df=36$ ,  $p<.05$ ), 「無答・わからない」への言及を増加させる傾向が示唆されたが, 「去年から今年への変化」の場合と同

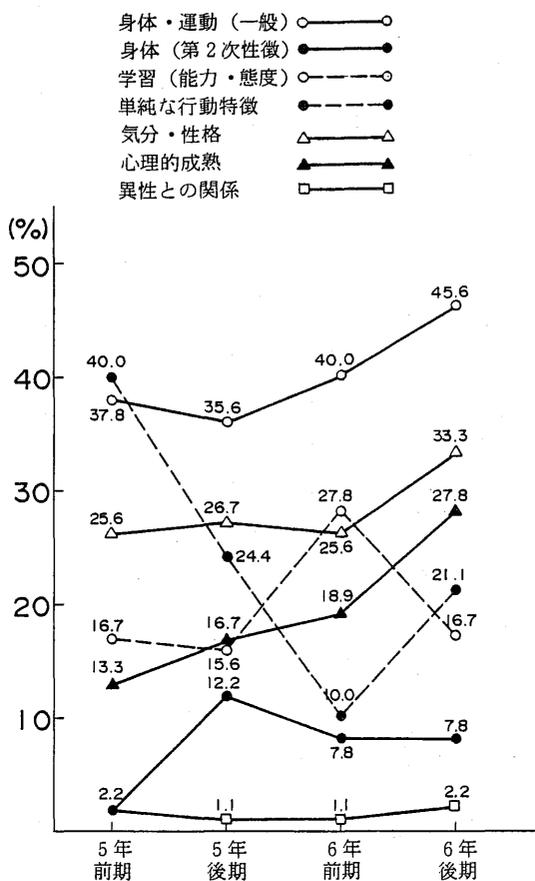


Fig. 4 各カテゴリーの変化に言及した者の割合 (男子, N=90)

男子あるいは女子の少なくとも一方で、(最大% - 最小%) ≥ 10 のカテゴリーのみ図示した。

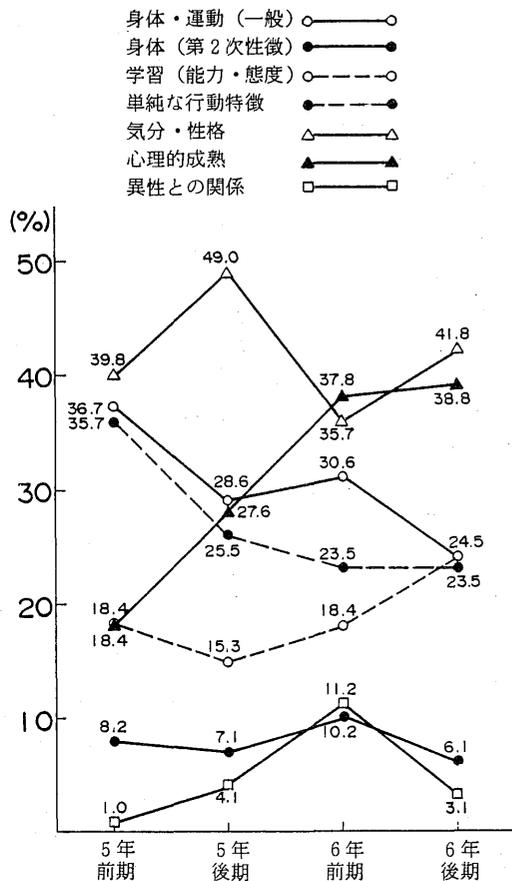


Fig. 5 各カテゴリーの変化に言及した者の割合 (女子, N=98)

男子あるいは女子の少なくとも一方で、(最大% - 最小%) ≥ 10 のカテゴリーのみ図示した。

様その影響力は必ずしも大きなものではない。

### 悩みについて

ここでは小学校5~6年生の「悩み」の状況について、その性差、縦断的变化、および身体発達のスパートの開始の影響等を検討する。

質問紙の4「悩み」への回答に基づく各調査時点における悩みの状況を、男女別に Table 14 に示した。表中の\*印は、同一時点において各項目に「はい」と答えた者の比率の性差の $\chi^2$ 検定の結果である。「おちつきがない」、「あきっぽい」、「すぐカッとする」等については、男女ともに5割から4割の生徒

が「なやんだりこまったりしている」と回答しており、この時期に一般的な悩みであると言える。性差については、「顔やスタイルがよくない」に対して、女子の方が一貫してより高い割合で「はい」と回答している。「太っている」についての回答にも同様の傾向が認められ、小学校高学年の女子児童が自己の容姿にかなりの関心を持っていることを示している。また「男子と仲が悪い」についても女子の方が「はい」と答える者の割合が大きいが、この性差は5年生の時点で顕著であり、6年生になると「はい」と答える女子が減少するため、ほぼ消失する。「まげずぎらい」、「のろま」、「人のいいなりになる」等の悩みに「はい」と回答する者の割合は、男女ともに学年が進むにつれて減少するが、これらの特性が弱

Table 11. 身長伸びのスパートが各カテゴリーへの言及に及ぼす影響(去年から今年への変化)

	男 未発現群 (N=41)	子 開始群 (N=15)	女 未発現群 (N=22)	子 開始群 (N=16)
身体・運動(一般)	-.24 <sup>†</sup>	1.33	.91	-.63
身体(第2次性徴)	.98	1.33	-.91	-.63
学習(能力・態度)	1.22	2.00	-.45	.00
単純な行動特徴	-2.68	-3.33	-1.82	-2.50
気分・性格	.00	2.67	-.45	6.25*
心理的成熟	.73	.67	1.82	-1.25
学年・地位	-.24	.00	.00	.00
同性との関係	.00	-1.33	.91	.63
異性との関係	-.24	-.67	.45	1.25
その他との関係	.00	.00	.91	.00
分類不能	1.46	-.67	.00	1.25
無答・わからない	-.24	-2.00	-.91	-2.50

† 正の値は言及の増加, 負の値は言及の減少を意味する。 \*p < .05  
得点の上限は30, 下限は-30である。

Table 12. 各カテゴリーの変化に言及した者の割合(%)  
(今年から来年への変化の予想)

	男子(N=90)				女子(N=98)			
	5年前期	5年後期	6年前期	6年後期	5年前期	5年後期	6年前期	6年後期
身体・運動(一般)	44.4	36.7	41.1	34.4	34.7	25.5	28.6	21.4
身体(第2次性徴)	10.0	12.2	14.4	13.3	15.3	10.2	14.3	9.2
学習(能力・態度)	31.1	21.1	18.9	20.0	23.5	23.5	18.4	14.3
単純な行動特徴	16.7	7.8	12.2	7.8	11.2	8.2	15.3	19.4
気分・性格	14.4	23.3	14.4	16.7	21.4	34.7	29.6*	30.6*
心理的成熟	17.8	24.4	23.3	37.8	36.7**	37.8	42.9**	39.8
学年・地位	2.2	1.1	7.8	5.6	2.0	2.0	5.1	9.2
同性との関係	5.6	3.3	0.0	1.1	5.1	6.1	9.2	12.2**
異性との関係	1.1	0.0	0.0	0.0	1.0	2.0	3.1	3.1
その他との関係	0.0	1.1	0.0	1.1	1.0	1.0	2.0	2.0
分類不能	4.4	2.2	3.3	0.0	5.0	4.1	0.0	1.0
無答・わからない	72.2	72.2	76.7*	74.4	73.5	74.5	60.2	73.5

\*\*p < .01 \* p < .05 (高い比率を示した方に\*\* や \* の記号をつけてある)

まるのか,あるいは特性は変わらないがそれらを気にしなくなるためか本調査のデータからは不明である。

先の分析と同様の手続きで,「はい」を10点,「いいえ」を0点に得点化し,身体発育のスパートの開始が悩みに及ぼす影響を検討した結果をTable 15に示した。

男子においては,スパートの開始に伴って「気が

弱い」悩みが有意に減少する( $t=2.72$ ,  $df=56$ ,  $p < .01$ )。また「反抗的」も減少するが,「おちつきがない」は増加する傾向が認められる。女子においてはとりわけ顕著な影響は認められないが,スパートの開始に伴って「顔やスタイルがよくない」悩みが増加する傾向があるといえる。

男子においては身体発育のスパートの開始は心理的な動揺を伴いながらも自信をもたらすのに対し

Table 13. 身長伸びのスパートが各カテゴリーへの言及に及ぼす影響  
(今年から来年への変化の予想)

	男 未発現群 (N=41)	子 開始群 (N=15)	女 未発現群 (N=22)	子 開始群 (N=16)
身体・運動(一般)	.00†	1.33	.91	-7.50*
身体(第2次性徴)	.00	-.67	-.91	.00
学習(能力・態度)	-.98	.00	-.45	-.63
単純な行動特徴	-.73	.00	.00	.63
気分・性格	.73	1.33	.91	.63
心理的成熟	1.46	.00	-2.73	.00
学年・地位	-.24	.00	.00	.00
同性との関係	-.49	1.33	.91	-.63
異性との関係	-.24	.00	.45	-.63
その他との関係	.00	.00	.45	.00
分類不能	.00	-.67	-.45	1.88
無答・わからない	-.24	-2.67	.45	4.38

† 正の値は言及の増加, 負の値は言及の減少を意味する。 \* < .05  
得点の上限は30, 下限は-30である。

て, 女子においては同様の変化がむしろネガティブにうけとられる傾向が示唆された。しかし全般的には, その影響力は必ずしも大きなものではない。

### 身近な他者の認識

これまでに, 自己概念や自己認識について検討してきたが, 次に身近な他者(「父」, 「母」, 「男の子」, 「女の子」)の認識と身体発育との関係について検討する。

#### 1. 方法

- (1) 質問形式と内容 たとえば「父」の場合, 「あなたにとって, お父さんはどんな人ですか」という指示文が与えられ, 3通りの自由記述で回答するように求められた。以下, 「母」, 「男の子」, 「女の子」についても, 同様になされた。
- (2) カテゴリーの設定と分類 分析にあたって, 次のカテゴリーを設定した。
  - ①肯定的反応(やさしい, 大切な, まじめな等)
  - ②否定的反応(こわい, いばる, 自分勝手な等)
  - ③両面・並列的反応(こわいけどやさしい, いやな人といい人がいる等)
  - ④中立的反応(背が高い, 男, めがねをかけている等)

各カテゴリーへの分類に先立ち, 「自己の変化の認識」の手續きと同様にして判定の信頼性の検討したところ, 90.7%の一致率を得た。

#### 2 結果と考察

##### (1) 全体的傾向

各対象について3通りの回答を求めたが, 第1反応がもっともよく感情を反映していると考えられるので, それについて検討する。各反応カテゴリーごとに分類された反応の割合は, どの調査時点においても男女とも各対象に対して「肯定的反応」と「否定的反応」で90%前後を占めている。これは, 少なくとも第1反応においては, 各対象に対して「好き-嫌い」等の肯定か否定かの両極端の感情が示されたといえる。

Fig. 6に, 全調査時点にわたって, 各対象ごとの「肯定的反応」と「否定的反応」の割合を示す。男女とも, 「父」と「母」に対しは, 一貫して「肯定的反応」が60%以上, 「否定的反応」が25%以下であり, 総じて両親には肯定的である。しかしながら, 明確な発達の傾向は見られず, わずかに男子の「母」と女子の「父」に対する「否定的反応」が増えるきざしを示している。また, 異性に対しては, 従来から言われているように, 「否定的反応」が強い。男子の「否定的反応」や女子の「肯定的反応」は調査時点による変動が大きい, 女子の「否定的反応」は減少傾向を示している。一方, 同性に対しては, 異性の場合とは反対に, 「肯定的反応」が強い。しかし, 女子では「肯定的反応」が70%以上ながらも減少傾向を, また, 反対に「否定的反応」の割合は低いながらもやや増加傾向を示している。男子においても, 同様の傾向がうかがえるが, 女子ほど顕著ではない。

Table 14. 悩みの内容の発達的变化と性差(「はい」と答えた者のパーセント)

	男子 (N = 90)				女子 (N = 98)			
	5年前期	5年後期	6年前期	6年後期	5年前期	5年後期	6年前期	6年後期
1. 背が低い	23.9	26.1	20.7	23.9	31.6	32.7	28.6	26.5
2. 背が高すぎる	2.2	5.4	1.1	2.2	7.1	12.2	9.2*	6.1
3. 太っている	21.7	22.8	21.7	18.5	29.6	36.7	33.7	31.6
4. やせている	19.6	19.6	13.0	13.0	15.3	14.3	12.2	7.1
5. からだが弱い	16.3	19.6	16.3	15.2	11.2	9.2	9.2	8.2
6. 顔やスタイルがよくない	21.7	27.2	25.0	19.6	44.9**	50.0**	42.9*	40.8**
7. 男(女)らしいからだつきにならない	10.9	13.0	13.0	9.8	18.4	19.4	15.3	17.3
8. 友だちにくらべて性の成熟が早すぎる	9.8	7.6	7.6	2.2	3.1	7.1	5.1	5.1
9. すぐらんぼうをする	18.5	17.4	10.9	13.0	14.3	11.2	13.3	14.3
10. おちつきがない	52.2	55.4	54.3	52.2	45.9	44.9	41.8	38.8
11. すぐカッとする	35.9	39.1	39.1	43.5	41.8	33.7	43.9	34.7
12. あきっぽい	45.7	44.6	50.0	47.8	49.0	48.0	43.9	43.9
13. 意地っぱり	18.5	22.8	17.4	22.8	29.6	26.5	27.6	22.4
14. いじわる	7.6	10.9	12.0	14.1	11.2	4.1	11.2	5.1
15. まげずぎらい	42.4	40.2	21.7	22.8	42.9	37.8	34.7	27.6
16. 気が弱い	25.0	28.3	18.5	22.8	28.6	24.5	32.7*	21.4
17. 人のいいなりになる	23.9	20.7	9.8	9.8	25.5	22.4	22.4*	18.4
18. のろま	27.2	25.0	20.7	16.3	31.6	30.6	24.5	20.4
19. いばる	7.6	10.9	7.6	7.6	12.2	9.2	13.3	8.2
20. わがまま	29.3	34.8	25.0	20.7	32.7	29.6	29.6	38.8*
21. だらしない	33.7	27.2	33.7	26.1	30.6	28.6	23.5	22.4
22. 反抗的	33.7	33.7	23.9	31.5	34.7	29.6	33.7	31.6
23. 男子と仲が悪い	4.3	2.2	6.5	7.6	22.4**	16.3**	11.2	12.2
24. 女子と仲が悪い	8.7	12.0	6.5	2.2	15.3	16.3	15.3	12.2

\*\*p < .01 \*p < .05 (高い比率を示した方に\*\*や\*の記号をつけてある)

## (2) 各調査時点における身体発育のスパートの発現との関係

ここでは、各調査時点ごとに前調査時点から身体発育のスパートがあったかなかったかにより、発現群と非発現群を設定し、各時点における第1反応について検討する。結果はTable 16に示す。

男子では、5年前期における発現群が4名しかおらず、比較が困難なため、その他3時点でみていく。

「父」に対して、両群とも「肯定的反応」が高く、「否定的反応」が低い。発現群の方がこの傾向を顕著に示している。「母」に対しても、「父」と同様に両群とも総じて肯定的であるが、5年後期と6年前期の間で発現群が極端な差、すなわち5年後期ではかなり否定的であるのに対して、6年前期では逆に肯定的に転じている、を示している。これは、ス

パートの発現時期と反応に関係のあることを示唆していると思われる。また、同性である「男の子」に対しては、両群とも一貫して70%以上の「肯定的反応」とほぼ20%以下の「否定的反応」を示しているが、発現群の方がより肯定的であるように思われる。他方、異性である「女の子」に対しては、「男の子」の場合とは反対に両群とも否定的であるが、6年後期で両群とも、とりわけ発現群で「否定的反応」が低下を示している。

一方、女子については、4時点とも各群の被験者が最低でも25名いるので、4時点での傾向を検討していく。まず、「父」「母」に対しては、男子と同様に両群とも肯定的である。「父」に対する反応では、調査時点により両群間で差がみられるが、一貫した傾向を示すものではない。また、「母」に対して、

Table 15. 身長伸びのスパートが悩みの内容に及ぼす影響

	男 未発現群 (N=42)	子 開始群 (N=16)	女 未発現群 (N=22)	子 開始群 (N=16)
1. 背が低い	.71†	-1.25	-.45	.00
2. 背が高すぎる	.00	.00	.45	-.63
3. 太っている	-.24	.63	.00	-1.25
4. やせている	-.48	.63	-.91	-1.25
5. からだが弱い	.24	1.25	-1.82	-.63
6. 顔やスタイルが よくない	.48	.00	.45	2.50
7. 男(女)らしい からだつきにな らない	-.24	-0.63	.45	.00
8. 友だちにくらべ て性の成熟が早 すぎる	-.95	.00	1.36	.63
9. すぐらんぼうを する	-1.19	.63	.00	-.63
10. おちつきがない	-.24	1.88	.00	-1.25
11. すぐカッとする	.48	.63	-2.27	-.63
12. あきっぱい	.24	.00	.00	.00
13. 意地っぱり	1.19	.63	-.45	-.63
14. いじわる	.48	-.63	-.45	.00
15. まけずぎらい	.00	1.25	-.45	-.63
16. 気が弱い	.48	-3.13**	.00	-.63
17. 人のいいなりに なる	-1.43	-1.25	-.45	-.63
18. のろま	.00	.63	-.45	.63
19. いばる	.24	-1.25	.91	-.63
20. わがまま	1.19	1.88	.91	.00
21. だらしがない	.00	.00	-2.27	.63
22. 反抗的	.95	-1.88	-.45	.00
23. 男子と仲が悪い	.00	-.63	-.91	-1.25
24. 女子と仲が悪い	-.95	-.63	.45	-1.25

† 正の値は悩みの増加, 負の値は悩みの減少を意味する。  
得点の上限は10, 下限は-10である。

\*\*  $p < .01$

発現群は5年前・後期で「否定的反応」が20%を越えて比較的高いが, 6年前・後期で「肯定的反応」が高まり, 「否定的反応」が低くなるのが特徴的である。これは, より初期のスパートの発現が「母」に対する否定的感情と関係があることを示唆しているといえよう。さらに, 異性である「男の子」と同性である「女の子」に対しては, 男子の異性と同性に対する場合と同様に, 全体としては異性には否定的であり, 同性には肯定的である。両群間に一貫した大きな差はないが, 非発現群が5年後期より「男

の子」に対する「否定的反応」を弱め, 6年前期より「女の子」に対する「肯定的反応」を弱めていることが傾向として見られる。

以上の結果から, 必ずしも断定できないが, 調査時点によって身体発育のスパートがあったための特徴があることが示唆された。

(3) 身体発育のスパートの開始との関係

(2) では, 身体発育のスパートの有無により検討したが, ここでは初めてスパートが開始したことによる影響について検討する。先に用いたと同様の

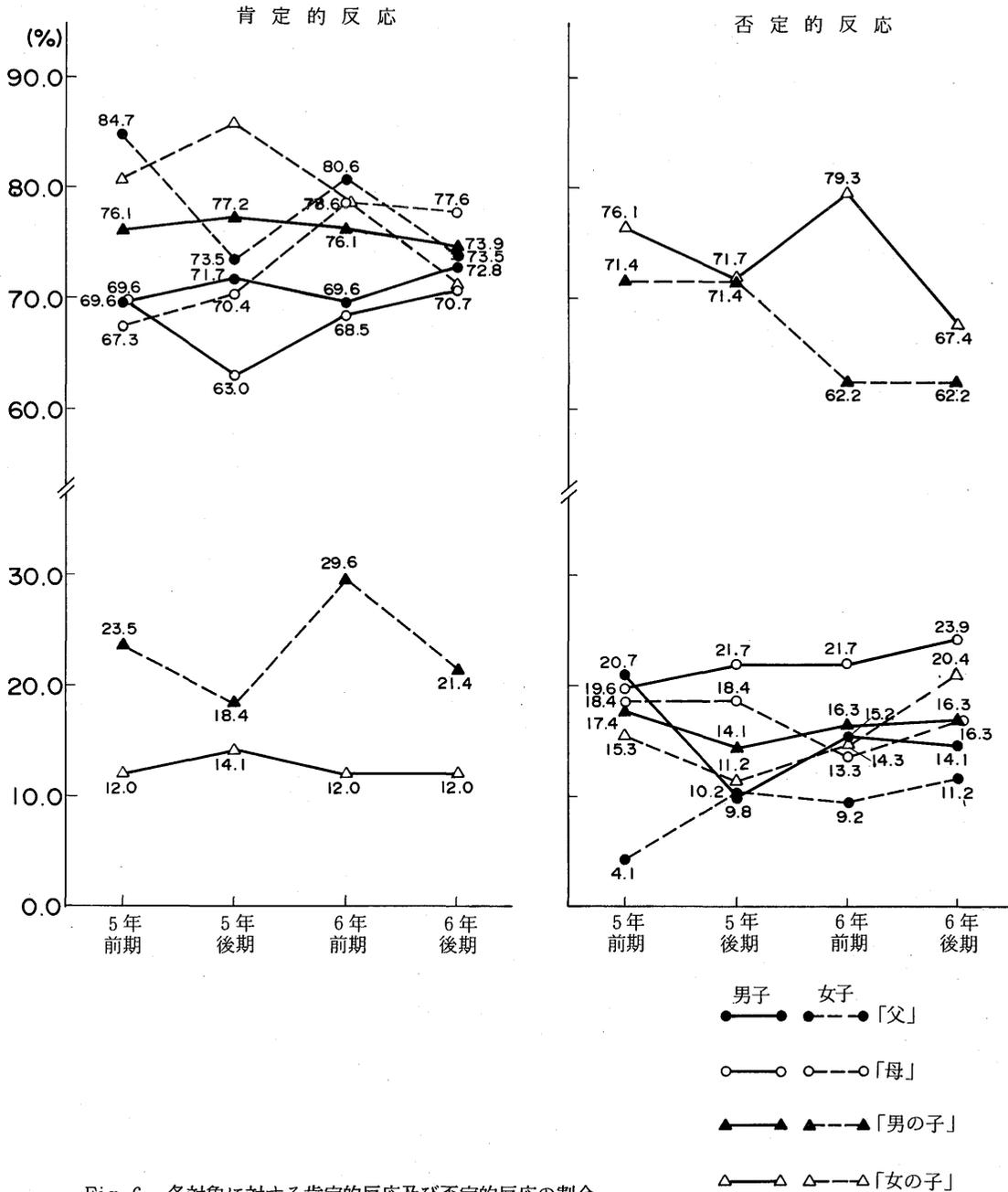


Fig. 6 各対象に対する肯定的反応及び否定的反応の割合

群分けの手続きで身体発育のスパートの開始群と対照群 (未発現群) を設定し、各対象とも第3反応までに対して、1反応に10点の得点を与え、同様の分析を行なった。(1)でも述べたように、ほとんどの反応が「肯定的反応」または「否定的反応」に分類

されるので、この両反応について検討する。結果は Table 17に示す。

男子で有意差が認められたのは、「父」に対する「肯定的反応」( $t=2.64, df=56, p<.05$ )、「母」に対する「肯定的反応」( $t=2.38, df=56, p<.05$ )で

Table 16. 各調査時期における非発現群, 発現群ごとの反応の割合 (%)

男 子		5 年 前 期		5 年 後 期		6 年 前 期		6 年 後 期	
対 象	† 反 応	非発現群	発 現 群	非発現群	発 現 群	非発現群	発 現 群	非発現群	発 現 群
		(n=88)	(n=4)	(n=66)	(n=26)	(n=66)	(n=26)	(n=54)	(n=38)
「父」	肯定	69.3	75.0	69.7	76.9	63.6	84.6	66.7	81.6
	否定	21.6	0.0	9.1	11.5	19.7	3.8	16.7	10.5
「母」	肯定	70.5	50.0	71.2	42.3	63.6	80.8	70.4	71.1
	否定	20.5	0.0	15.2	38.5	27.3	7.7	24.1	23.7
「男の子」	肯定	75.0	100.0	75.8	80.8	75.8	76.9	70.4	78.9
	否定	18.2	0.0	13.6	15.4	18.2	11.5	20.4	10.5
「女の子」	肯定	12.5	0.0	13.6	15.4	12.1	11.5	11.1	13.2
	否定	76.1	75.0	71.2	73.1	80.3	76.9	70.4	63.2

女 子		5 年 前 期		5 年 後 期		6 年 前 期		6 年 後 期	
対 象	† 反 応	非発現群	発 現 群						
		(n=69)	(n=29)	(n=42)	(n=56)	(n=72)	(n=26)	(n=73)	(n=25)
「父」	肯定	82.6	89.7	81.0	67.9	81.9	76.9	75.3	76.0
	否定	4.3	3.4	7.1	12.5	9.7	7.7	9.6	16.0
「母」	肯定	71.0	58.6	71.4	69.6	79.2	76.9	74.0	88.0
	否定	14.5	27.6	14.3	21.4	13.9	11.5	17.8	12.0
「男の子」	肯定	24.6	20.7	23.8	14.3	27.8	34.6	21.9	20.0
	否定	72.5	69.0	64.3	76.8	61.1	65.4	57.5	76.0
「女の子」	肯定	79.7	82.8	83.3	87.5	75.0	88.5	68.5	80.0
	否定	14.5	17.2	9.5	12.5	15.3	11.5	21.9	16.0

† 4反応のうち、「肯定的反応」と「否定的反応」の割合のみを示す。

ある。「父」に対しては、開始群の方が「肯定的反応」が減少し、「否定的反応」が増加している。また、「母」に対しても、開始群の方が「肯定的反応」が減少し、有意差はないものの「否定的反応」についても、「父」の場合と同様に増加傾向がみられる。これらのことは、(2)で示したように一般的には発現者は「父」、「母」に対して「肯定的反応」が高いのであるが、特にスパートの開始時についてみれば相対的に「父」、「母」に対する否定的感情の強まりに関係があることを示しているといえる。一方、同性や異性について大きな変化の違いは見られないが、開始群の方が相対的に「女の子」に対して肯定的になっている傾向が見られる。

女子で有意差があったのは、「女の子」に対する「肯定的反応」( $t=-2.62$ ,  $df=36$ ,  $p<.05$ )のみで、

開始群の方が「肯定的反応」を増加させ、統制群では減少させている。また、同じく「否定的反応」では開始群で微増するにすぎず、スパートの開始が「女の子」すなわち同性に対する肯定的感情の強まりに関係しているものと思われる。他方、男子で差が認められた「父」、「母」については、両群間に大きな変化のちがいは見られなかった。また、開始群では、「父」に対して両反応とも減少し、「母」に対しては肯定的になっている傾向がみられた。

#### (4) 身体発育のスパートの発現パターンとの関係

先に述べたように、身体発育のスパートの発現パターンより、未発現群、現発現群、終了群の3群を設定した。ここでは、この3群の特徴が最も顕著になるとと思われる6年後期における各対象に対する第

1 反応について検討する。結果は Table 18 に示す。

男子では、終了群が4名しかいないので、主としてこれ以外の2群について言及する。未発現群、現発現群とも、全体的な反応傾向は、これまで述べてきたことと大差はない。しかしながら、「肯定的反応」では現発現群がいずれの対象に対しても未発現群を上回っており、これに対応して「否定的反応」では未発現群が現発現群を上回っている。これは、現発現群が未発現群よりも身近な他者に対して肯定的であることを示しており、スポーツの発現が肯定的感情と関係しているものと思われる。

女子については、全体的傾向は前に述べたと同様であり、3群間の特徴は明確でない。「父」に対して、

現発現群、終了群が肯定的であるが、同時に終了群は「否定的反応」も高い。「母」に対しては、終了群が他の2群よりも相対的に否定的傾向をもっている。また「男の子」に対しては、未発現群がもっとも否定的傾向が弱く、「女の子」に対しては3群間に大差はない。

以上のように、男子では未発現群と現発現群の間に一定の傾向性が見られたが、女子では3群間に一貫した傾向性は見られなかった。

### 要 約

本研究は青年期の心身の相関関係の検討の一環として、思春期の身体発達が開始される小学校高学年

Table 17. 身体発育のスパートの開始が「肯定的反応」、「否定的反応」に与える影響

対 象	反 応	男 子		女 子	
		未発現群 (n=42)	開始群 (n=16)	未発現群 (n=22)	開始群 (n=16)
「父」	肯定	-1.19 *	-8.13	-1.36	-2.50
	否定	-0.95 *	5.63	1.82	-1.25
「母」	肯定	1.90 *	-6.25	0.00	3.13
	否定	-1.90	1.88	0.91	-1.88
「男の子」	肯定	1.19	0.00	2.27	3.13
	否定	-0.48	0.00	-5.00	-5.00
「女の子」	肯定	-0.71	1.25	-5.00 *	3.75
	否定	2.86	0.63	3.64	0.63

\*  $p < .05$

Table 18. 6年後期におけるスパートの発現パターン群ごとの反応の割合 (%)

対 象	† 反 応	男 子			女 子		
		未発現群 (n=42)	現発現群 (n=30)	終了群 (n=4)	未発現群 (n=22)	現発現群 (n=16)	終了群 (n=28)
「父」	肯定	66.7	86.7	50.0	68.2	81.3	75.0
	否定	14.3	6.7	25.0	13.6	6.3	14.3
「母」	肯定	73.8	80.0	75.0	86.4	87.5	71.4
	否定	21.4	13.3	0.0	13.6	12.5	17.9
「男の子」	肯定	73.8	80.0	50.0	36.4	18.8	10.7
	否定	16.7	10.0	25.0	50.0	81.3	57.1
「女の子」	肯定	7.1	16.7	50.0	77.3	75.0	78.6
	否定	71.4	60.0	50.0	18.2	18.8	21.4

† 4反応のうち「肯定的反応」と「否定的反応」の割合のみを示す。

の児童を2年間、4回にわたり追跡調査し、身体発達と心理的適応の対応関係を明らかにすることを目的とする。

このため、身長、体重等の身体計測のほか、自己概念(SD法)、自己の変化についての認識(自由記述)などから成る心理的適応に関する調査が5年生前期、後期、6年生前期、後期の4回実施された。分析の対象者は男子92名、女子98名である。

主な結果は以下の通りである。

- (1) 身体発達と自己概念の関係について
  - ① 身長および身長の増加量の大きい群は、小さい群と比較して、より肯定的、受容的な自己概念をもつ傾向を示した。
  - ② 男子の場合、発育のスパートの終了群は現発現群や未発現群より、また現発現群は未発現群より、肯定的、受容的な自己概念をもつ傾向を示した。
- (2) 自己の変化の認識について
  - ① 「気分・性格」、「身体・運動(一般)」、「心理的成熟」等が小学校高学年の児童の自己への関心の主要な内容である。
  - ② 「気分・性格」および「心理的成熟」への言及は女子の方が一貫して多い。
  - ③ 学年が進むにつれて、「心理的成熟」への言及が増加する。
- (3) 悩みについて
  - ① 「顔やスタイル」についての悩みは、女子の方が一貫して多い。
  - ② 身体発育のスパートの開始は、男子には自信をもたらすが、女子にはむしろネガティブに受けとられる傾向が示唆された。
- (3) 身近な他者の認識について
  - ① 男女ともに、「父」、「母」、「同性」に対する「肯定的反応」と「異性」に対する「否定的反応」が一貫して高いことが認められた。
  - ② 身体発育のスパートの開始が、男子においては「父」および「母」に対する否定的感情の強まり、女子においては「女の子」に対する肯定的感情の強まりと関係していることが示された。

## 引用文献

- 加藤隆勝・堀啓造・高木秀明 1981 青少年の対人イメージの因子的特質 筑波大学心理学研究, 4, 77-91.
- Lewin, K. 1951 *Field Theory in Social Science*. New York: Harper & Brothers. (猪股佐登留訳 1956 社会科学における場の理論 誠信書房)
- Mussen, P. H. & Jones, M. C. 1957 Self-conceptions, motivations and interpersonal attitudes of late- and early-maturing boys. *Child Development*, 28, 243-256.
- Peskin, H. 1967 Pubertal onset and ego functioning. *Journal of Abnormal Psychology*, 72, 1-15.
- Peterson, A. C. & Taylor, B. 1980 The biological approach to adolescence. In Adelson, J. (Ed.), *Handbook of Adolescent Psychology*. New York: John Wiley & Sons.
- 都筑学 1981 幼児の自己意識の発達 教育心理学研究, 29, 70-74.
- Zazzo, B. 1969 Le dynamisme évolutif chez l'enfant. In R. Zazzo (Ed.), *Des garçons de 6 à 12 ans*. Paris: P. U. F. (久保田正人・塚野州一訳 1974 学童の生長と発達 明治図書)
- 1984. 9. 30 受稿—

## 〔後記〕

本研究にあたり多くの方々からご協力、ご援助をいただきました。特に、出口博四、池田晟、古屋芳子、伊藤恭子、金子泰太郎、武川泰子、村上良法の各氏には大変お世話になりました。記して謝意を表します。また、度重なる調査にご協力いただいた児童の皆さんにも厚く感謝致します。



5. 元気な						元気がない
6. 協力的な						対立的な
7. 責任感のある						責任感のない
8. 自分勝手な						思いやりのある
9. けじめのある						けじめのない
10. いらいらした						おちついた
11. 自由な						きゅうくつな
12. やる気のある						やる気のない
13. 上品な						下品な
14. 考えが古い						考えが新しい
15. 公平な						不公平な
16. しっかりした						たよらない
17. きびしい						やさしい
18. たのしい						つまらない
19. いばる						したがう
20. きらいな						すきな

3. 身近な他者および自己の変化の認識

つぎの質問について、それぞれ三つ答えて下さい。ただし、どうしてもわからない時は、一つでも、二つでもかまいません。

(1) あなたにとってお父さんはどんな人ですか。

1. \_\_\_\_\_

2. \_\_\_\_\_

3. \_\_\_\_\_

(2) あなたにとってお母さんはどんな人ですか。

1. \_\_\_\_\_

2. \_\_\_\_\_

3. \_\_\_\_\_

(3) あなたにとって男の子はどんな感じですか。

1. \_\_\_\_\_

2. \_\_\_\_\_

3. \_\_\_\_\_

(4) あなたにとって女の子はどんな感じですか。

1. \_\_\_\_\_

2. \_\_\_\_\_

3. \_\_\_\_\_

(5) 去年きょねんの今ごろとくらべて、最近のあなたはどんなところが変わったと思いますか。

1. \_\_\_\_\_

2. \_\_\_\_\_

3. \_\_\_\_\_

(6) 来年らいねんの今ごろのあなたは、今のあなたとどんなところが変わっていると思いますか。

1. \_\_\_\_\_

2. \_\_\_\_\_

3. \_\_\_\_\_

#### 4. 悩み

あなたは、自分のからだや性格について、どんなことになやんだり、こまったりしていますか。つぎにあげることがらのうち、なやんだり、こまったりしているものに○をつけてください。○の数はいくつでもかまいません

1. 背せが低ひかいこと

2. 背せが高たかすぎること

3. 太ふとっていること

4. やせていること

5. からだが弱よわいこと

6. 顔やスタイルがよくないこと

7. 男らしいからだつき、女らしいからだつきにならないこと

8. 友だちにくらべて、性せいの成熟せいじゆくが早はやすぎること

9. すぐらんぼうをすること

10. おちつきがないこと

11. すぐカッとする事
  12. あきっぽいな事
  13. 意地いじっばりな事
  14. いじわるな事
  15. まけすぎらいな事
  16. 気が弱い事
  17. 人のいいなりになる事
  18. のろまな事
  19. いばる事
  20. わがままな事
  21. だらしない事
  22. 反抗はんこう的な事
  23. 男の子と仲なかが悪い事
  24. 女の子と仲なかが悪い事
  25. その他 → それはどんなことですか。下に書いてください。
-